

個人空間から地球環境までを考える

女子短期大学部 川崎 衿子



湘南キャンパスができた翌年の1986年4月に女子短期大学の家政科に赴任し、以来住居学、住居計画、住生活論、住居環境学などを担当。最近では学部共通科目として色彩学やインテリアデザインなども担当。専任教員となる以前は建築設計事務所を主宰し実務と研究活動を行ってきた。住宅設計においては生活者中心の空間づくりをモットーに、そして同時にいかに美しく豊かな空間を実現できるかに心を砕いている。(かわさき・えりこ)

住まいは人間にとって最も基本的な生活の場である。したがって住まいのあり方は心身の健康はもとより、子どもの成長や家庭生活の安定、高齢者の自立など私たちの人生と大きく関わっている。ここで紹介する授業では、住空間と自分自身の生き方をいかに関連させるかを大きな課題にしている。本年度からは教育学部でも短大と同じ内容の授業を担当することとなり、以下はその実践である。

1. 住居学習の目標

生まれた時から誰でも「うち」の中で育つ。「うち」の記憶は住空間や家庭の光景、家族関係、行動様式が重なり合い一つの文化圏が形成され自分自身の人格のなかに取り込まれている。

学生たちが最初に住空間を考える時、まず手本にするのが自分が経験した空間、すなわち「自分のうち」である。しかし、ほとんどの学生は日常生活のなかで「自分のうち」との関係が希薄で、自宅の状況を把握し得ていない。実体験として住空間と深く関わりをもっていれば、毎日の生活の中で不便なところ、非能率的なところ、改善が必要なところなどは気がつくはずであるが、家事に手を出さず、家庭機能は一段と外在化したなかで育った子ども達は、大方住まいについて無関心である。

現在、住居分野の学習は小・中・高校の家庭科の中で一貫性をもって扱われている。平成6年から始まった家庭科の男女共修の目標では、男女が協力して家庭生活を営むことを理念としている。そして「基礎的な知識と技術を総合的に体験的に修得させ、家庭生活の充実向上を図る能力と態度を育てる」として

いる。さらに本年度からの指導要領では、これらに加えて新しいライフスタイルの創造や住文化の理解が重要とされている。戦後の混乱期から始まり、経済優先の価値観を見直す時期を迎えている今、住居学習の目標も大きく変わろうとしている。

住居学習の目標は第一には住意識の向上と住まいに対する主体的な価値判断能力の養成である。従来日本人の住居観は主体的に住まいを考える態度が希薄であるとされてきた。このことはわが国の住居水準を低レベルにとどめてきた要因でもあるともいわれ、先進諸国のなかでわが国の住居は見劣りが目立つことは否めない。この時代にふさわしい高性能、高水準の住まいを求めるならば、教育の面からも住居学習は重要性が求められるものと思われる。

第二には住居計画の知識と技術を養うことである。多様なライフスタイルに対応した生活の基盤を創出できる能力と生活を総合的に捉える視点、そしてそれらを表現できる技術が必要とされる。

第三には環境教育としての住居学習である。環境に負荷を与えない暮らし方は、住居教育

の場で重要な役割を果たしている。自然エネルギーの利用、省エネ住宅の研究など課題は山積している。

第四は日本の住生活文化の伝承と理解である。住生活文化は時代とともに変化していくが、その変化を見つめることで自分自身の生活の由来を知ることができる。どうして、何故ここに住み、独自の習慣や起居様式を何故継承しているのかを考えることによって住まいへの愛着と関心を高めることができる。

高校までの家庭科における住居学習が充分とは言えないなかで、本学で住居学にふれる学生たちにどのような授業を展開したらよいのか、常に教材を新たにしながら試行錯誤を重ねている。ここでは「住居学」「住居学演習」「ライフデザインと住まい」を取り上げ、その実践を紹介したい。

2. 「住居学」

本学教育学部学校教育課程・家庭専修の必修科目である。1年生最初の授業では学習指導要領における住居領域の指導目標を学び、わが国の住宅政策の現状、住宅事情を考察している。

次に健康な暮らしのための住まいへと導いている。健康な暮らしを阻む要因はますます複雑化しているが、住まいが担わなければならない課題は多い。健康は時間的にも空間的にも持続性が求められ、問題として取り上げる時には科学的な態度が必要となる。温度、湿度、気流、騒音、照度、採光、空気汚染などの状況を知るためには、測定器を使った科学分析を試みたいところではあるが、半期の授業では講義内で修めざるを得ない。その場合でもできるだけ身の回りの具体的事象からの導入を心掛けている。

また科学技術に依存しすぎない自然な暮らし方についての考察も大切である。自然との関係が疎遠になるにつれて、住まいが不健康になっている現状を分析し、豊かな社会のなかでの快適性とは何かを探っている。

歴史風土のなかの住まいでは、わが国の住居史を学びながら、各時代の住生活の理解に

重点をおいている。一般的な住居史では、ややもすると上流階級中心になりがちであるが、庶民の暮らしの理解は今日の日本人の生活様式を解明する上で欠かすことができない要素である。気候条件や生業形態から人々はどのような住まいを成立させてきたのか、どのように暮らしていたのか、家族関係はどうであったのかなど学生の関心も高い。

日常生活と地域社会・コミュニティでは、近隣環境から都市環境までを取り上げている。望ましい住宅地の形成に必要な条件整備を、福祉の観点から考え、子ども、高齢者、障害者にとって住みやすい環境のあり方を探っている。当然、ノーマリゼーション、バリアフリー、ユニバーサルデザインについての具体的事例を示しながら講義を進めている。これだけでも一つの科目になりうるテーマではあるが、残念ながら現状の授業計画では1時間にとどまらざるを得ない。

住生活から地球規模の環境を考えることも大切な課題となっている。公害の発生から環境問題へと変化していく時代の流れ、社会構造や環境意識の変化を把握しつつ、自分自身の身近からの環境負荷の原因となる行動様式が制御されることを期待している。

春学期授業での最後は「世界の住まい」で締めくくった。気候、社会、文化の違いを背景に世界にはさまざまな住まいが存在することを紹介した。この時は通常の教室からコンピュータ演習室へと場所を変え、パワーポイントを用いての授業を試みた。



住居学・世界の住まいを見る

3. 「住居学演習」

「住居学」と同じく家庭専修の科目であるが、2年生の選択科目である。本年度春学期では15名が履修登録をした。以前短大では同じ科目、同じ内容で50名を1クラスとし、4クラスの授業をしていた頃があり、思い出すと隔世の感がある。

住居計画には、当然設計製図の知識と技法が要求される。住居に対する抽象的な要求を具体化するには表現手段が必須となる。また第三者への住要求伝達手段としても図面は不可欠である。設計と製図は両方が重なり合っただけでよい住居計画が提示される。しかしながら、建築設計の専門家養成を目的とした製図法は複雑、高度すぎて本学学生に応用するには負担が大きい。一般的な設計製図の指導書のなかには、単に製図能力の開発を目指しているものも多く、これからでは生活行為から住空間をとらえる視点の養成は難しい。

最初は「私の部屋」を自由に描くことから着手し、縮尺も図法も表現法も何も制限をしない。そこから自分の部屋の機能や広さ、家具・装備、他の部屋との関係、自然との関係を整理していく。個人差は大きいですが、デザインに関心のある者ほど、空間表現も長けている傾向がみられる。そのような空間構成の成果に助言を加えながら、部屋から住まい全体へと発展させ「こんな家に住みたい」というテーマに取り組む。

本年度の実践では「二人で住む家」を設定した。二人の組み合わせは兄弟姉妹、親子、夫婦、高齢者同士、友人同士などを自分で設定し、今自分が最も関心の高い住宅を表現することとした。結果として「友人と住む家」が多かったが、別々の仕事を持ち今日的なS OHOをイメージしていることは興味深い。

製図の最初はT定規と三角定規を使って線を引く練習である。縦線、横線、斜め線、実線、鎖線などの種類と用法を理解し、なおかつ常に均質な線がかかるよう練習を重ねる。

次には縮尺の理解であるが、1/100と1/50の両領域を行きつ戻りつしながら、実際の寸法との関係を把握していく。

最終的にはケント紙に鉛筆がきで1/50の住宅を完成させる。実際にケント紙の作業に入ったのは9回目の授業からで、何人かは授業外で自習で補ってはいたが、実質5回のうちでほとんどの者が作業を終えることができた。設計製図とも全体的にレベルが高く、学生達の努力にこちらが教えられたことが多い。



住居学演習・設計製図にとり組む



住居学演習・設計製図も完成直前

4. 「ライフデザインと住まい」

短大の2年生の選択科目であるが、授業では自身の生涯設計と照らし合わせた住まいを計画することを目的としている。

少子・高齢化、女性の社会進出、家庭機能の減衰、生活の24時間化、都市型生活の拡大、家事労働の簡便化、自由時間の増加、等々は当然住むことの意識を変えていく。人間生活にとって何が大切であるかを見きわめ、よりよく生きる「ライフデザイン」を求めると住まいの計画は密接な関係がある。

授業の展開としては、最初に20年後の自分やその家族像を推定し、同時にその時の社会情勢や環境を想定するレポートを資料を添えて提出する。次にそれにふさわしい自分の住

まの規模や立地、住まいのあり方を考える。具体的には、自分がどのような仕事に就いて週に何回位買い物に行くか、冷蔵庫の大きさは、洗濯機の置き場は、テレビの場所は、ダイニングテーブルは、キッチンは、靴脱ぎの習慣は、と考えなければならない課題は山積している。それらはすべては住居計画の図面上に反映される。

最終的には設計製図の図法に従って 1/50 の縮尺でケント紙に鉛筆でかき、色つけ、雑誌・グラビア・カタログからの切り貼りなどをして一枚のプレゼンテーションボードを制作する。



「ライフデザインと住まい」の授業

で幸せに満ちた生活を感じさせる作品に出会うことがある。最後に各人が自分の作品の発表を行う。相互に作品を見て意見交換をして、その結果得られる刺激は貴重なものと思うが、最近の傾向として他人の作品に意見を言わなくなっているのが残念である。

将来像をつくりあげる楽しさと難しさはあるが、その過程のなかで自己認識と自己実現への意欲が生まれてくれば嬉しいことである。

以上簡単に授業の一部の概要を記したが、ご批判ご意見をいただければ幸いである。

この時、デザインセンスが顕著に現れてくる。少しの色づかいやレイアウトでいかにも快適